

# 悩まない フライマンたちへ

ROUND 34

文 中馬達雄

(鹿児島県鹿児島市/ちゅうまんの夢や)

## 今ごろスベイキャスト始めました。

アナログおやじがパソコンいじり始めて3年、遅れてきた新しいものの好きの次のチャレンジは、なんと今ごろスベイキャスト。

誰も振れないフライロッド

「スベイ」という言葉を初めて聞いたのは35年前、メーカーの人に17フィートのダブルハンドを持たされたときでした。スコットランドへの輸出のサーモンロッドでしたが、全く振れませんでした。その場にいた人は誰も振り方を知らなかったのです。

27歳の私は知識欲満々で、メーカーの人に根掘り葉掘り質問していたのですが、「スベイ」に関しては質問を受けつけない気まずい雰囲気があったことを覚えています。

結局、オーバーヘッドキャスト用

の14フィート#12のダブルハンドを作ってもらって、古典的なキャストをしましたが、とても天然プリに見えるような重量ではありませんでした。当時エサ釣りで使っていた4.5m(15フィート)のイシダイ竿よりはるかに持ち重りするロッドでした。ナイトゲームのスズキに使った時の貴重な写真が下です。

スベイに手を出さない理由は2つ

世の中の作られた流行に無関心だったのに、再びスベイキャストに興味を持ったのが4年前でした。自分自身のキャストイングを広げるためにも、生徒さんの悩みを解決するためにも、シングルハンドキャストに 응용できそうなものを探していて、スベイに興味を持ったのです。

本誌にも登場された野寺氏のスベ

イキャストのDVDを繰り返し見て、その動きをシングルハンドでの逆スタンスでのベルジャンキャストに取り入れました。

しかしまだ、本格的にスベイキャストを始めようとは思っていませんでした。

その頃、清水さんがスベイキャストを駆使して、下げ潮の河口でチヌを釣りまくりました。それに触発されて、樗木君が「スベイは開けた川のマス釣るのにも有効だ」と言い、真剣にダブルハンドスベイの練習を始めました。

うまくなるにつれ、何人かが興味を持ちました。当然のことながら、やったことのない私は聞かれても何も答えられません。受け売りはいやですので「わからん」というしかありません。今年に入っても、なかなかふんざりにつきませんでした。

ふんざりをつけられない理由は2つありました。

ひとつは、タックルが百花繚乱でわけがわからない。

もうひとつは、海の小物を釣るにはオーバーな道具なのに、海の大物を釣るには長すぎてやりとりにも重すぎる。

悩む前にひっ飛ばせ!

鹿児島にはサケのいる川がないからスベイはやらない、とは言いません。高い岸壁からの釣りには使えないなりにませんが、下げ潮の河口での釣りではスベイの釣りは効果的です。対象魚が増える可能性が高い。

それでも、プラスチックを遡巡してしまいました。年齢的にも無理ではないか? シングルハンドロッドを振ってきた時代が長すぎたために、いまさらダブルハンドを持ってても苦労するだけで挫折するのが目に見えているのではないかと?

薩摩のわらべ歌に「泣こうかい、飛ぼうかい、泣こよっかひっ飛ば」というのがあります。なにを隠そう、私は小学生時代に東芝レコードにこ

の歌を吹き込んだ経験があります。

ひっ飛ばしました!

単純にキャストイングの面白さだけでなく、スベイキャストにチャレンジしてみる価値がある、と思うことにしました。飛んで飛び損ねても怪我をするだけで死にやしない。「スベイの下手なプロシヨップ」の看板を揚げればいいだけのこと。

鹿児島県のフライ人口も高齢化が進み、50代後半のベテランに元気がありません。60代の私が新しいキャストイングにチャレンジすることで元気になるきっかけを与えられたらいい。

キャリアを重ねたベテランにも、基礎から伸びあがってきた中堅にも、もがいている若い人にも、苦労する私が見本になればいい。

あえて使いつらいタックルを選ぶ

さて、タックルはどれにしようか? シングルハンドのフライキャストイングを初心者に教えるときには、練習用のロッド選びを以下のようにアドバイスします。若い人には「優等生以下」のロッドを、若くない人

には「優等生のなかで一番下」のランクのロッドをすすめます。

昔、キャストイングスクールの生徒さんには投げづらいグラスロッドで半年間、じっくり基本ループを練習させていました。その結果、フライを始めると5年たったときの生存率が1割しかなくても、その1割はいろんなキャストイングができる凄腕のフライマンになっていきました。

人にさせたことは自分でもするべきでしょう。自分のスベイタックルを選ぶにあたっては、「優等生以下」のロッドでしかも「重すぎない」ラインにしようかと決断しました。

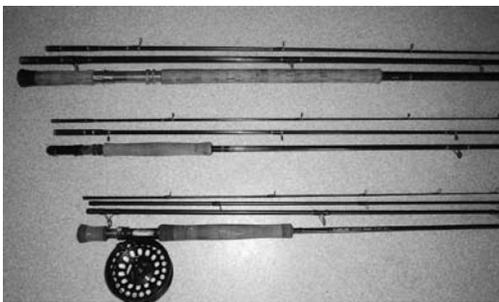
スベイのラインは重いです。5〜6番のロッドなのに420グレインなどと2番手以上のライン重量を指定しています。その方が飛ぶのだからいいのだ、と言われても、「長けりや飛ぶ」、「重けりや飛ぶ」という常識に逆らいたい。

理想のスベイ入門タックルを発見

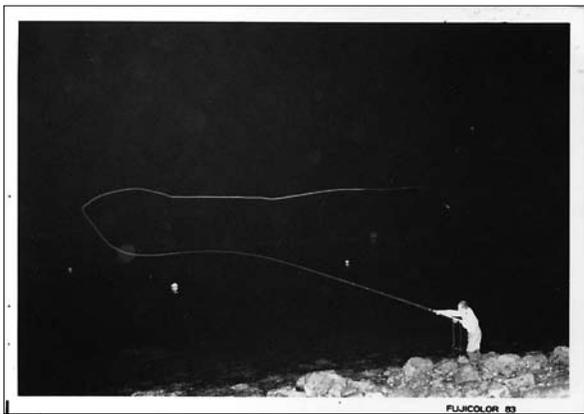
そう思っていたら、11フィート7番のスイッチロッドなるものを見つけました。シングルでもオーバー



明け方からの釣りの後、朝8時半くらいに公園へ行ってスベイキャストの練習。ビデオカメラを三脚に設置して自撮りし、店に戻ってから自分でチェック。これを毎朝。「スベイの練習の時間はみなさん仕事に行くので誰もつきあってくれません」とのこと。(編)



上: 35年前のオーバーヘッドキャストロッド14フィート#12。中: 32年前のシングルハンド11フィート#7-8。今振るとシングルハンドスベイに向けたロッド。32年前にすでにスイッチロッドはあった。下: 今年のスイッチロッド11フィート#7-8。リール、ライン、バックリング、ロッドケースまでついて4万円を切る。(中馬)



1978年ごろの夏の夜、重富白浜海岸でライズするスズキを釣ったときの写真。14フィート#12のダブルハンドロッドでは大袈裟すぎて面白くなかった。(中馬)



今年の秋のアカマス釣りは9月下旬になって入れ食いになった。毎朝の釣りのあとは店の前の歩道でカマスの干物作り。中馬さんによると、「ネコもばあさんも通るけど誰もとっていきやらん。」(編)

キャストイングの面白さだけでもスベイに  
チャレンジしてみる価値がある、と思うことにした。